

第28期図書館学教育部会の発足にあたって

高山 正也 (図書館学教育部会長)

去る 5 月 12 日に日本図書館協会で開かれた今年度の図書館学教育部会の定例総会で、かねて部会報でお知らせしていた部会員の皆様から選挙され新幹事の皆様に加え、部長指名幹事としての 3 名の方を加えた、28 期の新執行部を新年度の事業計画、予算案と共に承認していただきましたことをご報告し、併せてお礼申し上げます。新執行部のメンバーは、本号に記載されている部会総会記録をご参照いただくこととして、併せて本年度の事業計画をはじめとして新執行部が取り組む事業に、部会員各位からの力強いご協力とご支援を心からお願い申し上げます。

もとより第28期の当部会事業は過去26・27期に実施してきた事業の成果をふまえ、それらを更に発展させる形の事業とする所存です。顧みますと26期には主として97年から施行された新施行規則による20単位体制（必修；18単位以上12科目、選択；2単位以上5科目から）の周知とその下での教育の定着と習熟、更には教材の開発などに力点を置いてきました。27期では20単位体制の下での司書課程・講習の教育が一応の定着をみたとの前提の下に、より魅力のある図書館学教育にすべく、部会研究集会を年2回開催として、教科担当教員の授業計画の参考ともなり、ファカルティー・デヴェロップメント (FD) としての狙いも持ったプログラムを資料組織、情報検索、情報サービス、更に図書館概論などの各科目について試行的に始めてみました。この試みは概ね好評であり、それなりの成果も挙げ得たとささやかに自負しておりますが、是非部会員の皆様から率直で忌憚のないご評価もいただきたいと考えております。

こうして部会員の皆様のご努力の結果、図書館学教育の内容や水準は平均的にみると、格段の変化・進歩を実

現し得たと確信しておりますが、残念ながら、図書館学教育を取り巻く環境はますます厳しさを増しております。

すなわち、図書館学教育が展開される大学の経営環境は18歳人口の減少をうけ、厳しさを増す一方であり、各大学では大学の存続を目指して様々な改革が行われていることはご案内の通りです。更にこれに追い打ちをかけるように国立大学の独立法人化や大学の自己点検・評価の実施に伴い、国・公・私、4年制・短大、有名大学・新設大学入り乱れての学生の奪い合いや、学内教育体制、制度、組織の改編が起っています。具体的にいえば、学生が集まりそうにない学科や課程は統廃合の対象になり、将来性があると見込まれるという、具体的には媒情報関係では、特に大学院を中心に、研究科・専攻・コース、更には学環などというもので作られて、表面的には活気づいています。そのような中で図書館学の分野は一見平穏と見えるかもしれませんが、それが沈滞につながらないという保証はありません。気がつくど、図書館・情報学や司書課程分野の学生が進学や就職に際して、みんな媒情報分野に流れているかもしれないのです。そうならないためには図書館学に魅力を付け、新しい時代に適した図書館学、学生や社会が求める図書館学を展開しなければなりません。

図書館学教育にとって、もう一つの重大な問題は、図書館学の履修者、司書資格の取得者が図書館をはじめとする目指す分野に就職できないという問題があります。司書資格取得者が目指す職場や職域に仕事を確保できるか否かは採用側が主導権を持っているため、図書館学教育の側でどうすることもできない問題ではあります。しかし図書館への就職率の低さは図書館・情報学や司書課程の学生離れ、魅力の喪失の原因ともならないと言えな

いだけに座視できない問題です。この問題への対策は従来通り、採用側の啓蒙を続けると共に、ともかく有効な対策を考えるための基礎資料として、図書館学履修者、司書資格保持者の就職実態を明らかにする必要があると考えます。そこでこのための準備を早速今年度から着手いたします。このような基礎的なデータさえもないままに放置されてきたこと自体、図書館学教育行政や図書館施策が如何に無責任なままに行われてきたかの証ではないかとさえ思います。

現状の司書の資格が社会的な要請にできていないというのであれば、研修というような補完策でよいのか、新たな資格の創出という抜本策を考えなければならないのか、も検討する必要があります。既に日本図書館協会が研修WGの報告をまとめるに際して開いた公聴会では、「現状の司書とは別の上級資格を作れ」、「図書館専門職には修士以上の学位が必要」、との声（このような要求は大学図書館や専門図書館の分野では昔からあること

は皆様ご承知のとおりです）が公共図書館の現職者の間からすらあがっているのです。ともかく、図書館学教育に魅力を付けることが大事ですが、そのためには図書館学を学ぶことにより取得できる資格が魅力ある資格である必要があります。現行の司書資格が本当に魅力がある資格かどうか、もし魅力を失っているなら、魅力ある資格はどのようなものであるべきか、それを実現するためにどうすべきかを考える必要があると思います。

21世紀の幕開けとなる28期執行部の門出にあたり、21世紀図書館学の発展の基礎となるべく、図書館学が学生にとっても、資格保持者にとっても有益で、誇らしい図書館の専門資格につなげられる図書館学教育を展開するべく、基礎的な課題の解決を従来の図書館界の慣習にとらわれず、たゆまずに取り組んで行きたいと考えます。部会員の皆様のご協力とご支援を重ねてお願いし、28期新執行部発足のご挨拶と致します。

21世紀図書館学の確立と発展—「図書館(学)概論」を中心に— 2001年度 第1回研究集会開催

5月12日（土）に図書館学教育部会総会開催にあわせて研究集会が開かれた。これは、部会総会になるべく多くの部会員に参加していただくという意図のもとに、数年前から実施しているものです。5月中旬といえば、新学期が始まり、なにかと多忙な時期ですが、この試みも定着し、今回も37名の参加者を得ました。

基調講演の三浦逸雄氏（東京大学）は「新しい情報環境下における「概論」の可能性」という副題のもと次のような構成で、現在の我々がおかれた状況から説きおこされました。

- 1 「図書館学教育の日本的構造」
- 2 「図書館学教育の環境変化と適応」
- 3 「新しい時代における「概論」の可能性について」

2のデジタル情報環境下の図書館機能、3の図書館学教育の知識ベース、「概論」の構成および米国「ライブラリー・スクール」における「概論」相当科目についての解説など、示唆に富み、今後「概論」をいかに捉え、

教えるか、我々がとりくむべき課題について、参加者それぞれが考え、再確認する機会となりました。

次いで二村健氏（明星大学）による「図書館概論」の実践と展望と題した事例報告がありました。基本姿勢はライブラリアンシップの錬成とのことで、教科書を使わずプリントと板書により講義を進めておられます。プリントは当初B4で72枚用いておられたそうです。現在は4枚のみで、最初に「図書館って何？」そして司書に要求される能力、司書として好ましい特性あるいは司書に向いている人から始まり、図書館の仕事（図書館活動）を柱に、『図書館法』や『市民の図書館』『中小レポート』に言及しつつ、サービスの展開および変容について受講生に考えさせる内容とのこと。学生への課題も示され、参加者からは大変参考になったとの感想が寄せられました。

（文責 阪田蓉子幹事）

図書館学教育部会2001年度総会議事録

日時：2000年5月12日（土）13：30～14：00

場所：日本図書館協会新館研修室

現時点での部会員数271名のうち、出席が22名、委任状が81名の合計103名であり、総会が成立する旨の報告が高山正也部会長（慶應義塾大学）よりなされた。続いて、尚絅大学の植村芳浩氏を議長に選出し、審議に入った。

1. 2000年度活動報告

以下の活動に関して、高山正也部会長より報告があり、了承された。

(1)部会総会：2000年5月13日（土）、於 東横学園女子短期大学211教室、議題：【1】1999年度事業報告および会計報告、2000年度事業計画および予算

(2)第86回全国図書館大会（沖縄）第12分科会：2000年10月26日（木）於 八丈荘、テーマ：図書館学教育の外部評価—半世紀にわたる司書講習および司書課程教育を顧みて、報告者：細野公男、立川由美、運天厚子、木下和彦、朝比奈大作

(3)研究集会：【第1回】2000年5月13日（土）、於 東横学園女子短期大学211教室、テーマ：図書館学教育におけるファカルティディベロップメント

(1)—インターネット環境を用いた情報サービスの指導、報告者：緑川信之、大庭一郎、岸田和明、【第2回】2001年3月5日（月）於 国立情報学研究所 研修室・会議室、テーマ：図書館学教育におけるファカルティディベロップメント(2)—資料組織技術の最新動向、報告者：三輪眞木子、古川肇、柴田正美、渡部満彦

(4)「日本の図書館情報学教育2000」の発行

(5)役員選挙

(6)部会報の発行（第56号～第59号）

2. 役員選挙について

上記(5)の役員選挙に関して、戸田慎一選挙管理委員長（東洋大学）が所用によりこの部会総会に出席できないため、代わりに高山正也部会長より選挙結果が報告され、

さらに部会長指名幹事として3名の方に決定したことが発表され、了承された。選挙によって選出された部会長と幹事および部会長指名幹事は以下のとおり。

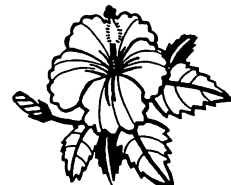
部会長：高山正也（慶應義塾大学）、選挙選出幹事（五十音順）：逸村裕（愛知淑徳大学）、岸田和明（駿河台大学）、阪田蓉子（明治大学）、宮部頼子（白百合女子大学）、渡部満彦（大妻女子大学短期大学部）、指名幹事（五十音順）：大谷康晴（青山学院女子短期大学）、岡田靖（鶴見大学）、田中岳文（東海大学）

3. 部会幹事会の開催状況

高山正也部会長より、部会幹事会の開催状況が以下のとおり報告され、了承された。【第1回】2000年4月8日（土）於 青山学院大学青山キャンパス総研ビル第12会議室、【第2回】2000年5月13日（土）於 東横学園短期大学図書館会議室、【第3回】2000年7月22日（土）於 明治大学研究棟第6会議室、【第4回】2000年9月24日（日）於 青山学院大学青山キャンパス総研ビル第16会議室、【第5回】2000年12月1日（金）於 青山学院大学青山キャンパス総研ビル第15会議室、【第6回】2001年1月23日（火）於 青山学院大学青山キャンパス総研ビル第15会議室、【第7回】2001年3月5日（月）於 日本教育会館 2F KIZANCルーム、【第8回】2001年3月31日（土）於 慶應義塾大学三田キャンパス新研究棟研究会議室

4. 2000年度決算報告

野末俊比古幹事（2000年度会計担当幹事、青山学院大学）より、2000年度の決算報告がなされ、併せて会計監査も無事終了した旨が報告され、了承された。



平成12年度（2000年度）決算報告

収入の部

費 目	予 算	決 算
部 会 費	558,000	518,000
事 業 収 入	90,000	142,500
交 付 金	180,000	180,000
協 会 補 助	100,000	100,000
雑 収 入	0	168,000
預 金 利 子	0	4
繰 越 金	395,811	395,811
合 計	1,323,811	1,504,315

支出の部

費 目	予 算	決 算
事 務 用 品 費	30,000	3,742
振 込 手 数 料	20,000	15,380
会 議 費	120,000	179,661
通 信 費	170,000	111,990
交 通 費	288,000	168,000
人 件 費	50,000	0
会 報 等 印 刷 費	200,000	57,120
研 究 集 会 等 費	190,000	138,017
調 査 ・ 編 集 費	100,000	0
選 挙 管 理 費	150,000	35,212
雑 費	5,811	0
繰 越 金	0	795,193
合 計	1,323,811	1,504,315

上記のとおり相違ありません。

平成13年 5月10日

会計担当幹事 野末 俊比古 ㊟

平成12年度（2000年度）会計監査報告

平成12年度（2000年度）の会計監査の結果、事務処理、帳簿記入は正確に行われていることを報告します。

平成13年 5月10日

会計監査 宮内 美智子 ㊟

平成13年 5月10日

会計監査 前園 主計 ㊟

5. 2001年度事業計画

高山正也部会長より、2001年度の事業計画が提案され、了承された。事業計画は以下のとおり。(1)全国図書館大会（岐阜大会）分科会の運営、(2)研究集会の開催（年度内に2回）、(3)部会報の発行（年度内に3～4回）、(4)司書資格取得者の就職状況の調査、(5)その他（図書館における高度専門職者の研修と名称付与の検討、「図書館情報学教育」の調査方法の検討）

6. 2001年度会計予算案

高山正也部会長より、2001年度の予算案が以下のように提案され、了承された。

収入の部

費 目	予 算
部 会 費	512,000
事 業 収 入	20,000
交 付 金	180,000
協 会 補 助	100,000
繰 越 金	795,193
合 計	1,607,193

支出の部

費 目	予 算
事 務 用 品 費	10,000
振 込 手 数 料	30,000
会 議 費	240,000
通 信 費	160,000
交 通 費	384,000
人 件 費	100,000
会 報 等 印 刷 費	200,000
研 究 集 会 等 費	180,000
調 査 ・ 編 集 費	300,000
雑 費	3,193
繰 越 金	0
合 計	1,607,193

（文責：岸田和明幹事）

第1回研究集会・参加者の声

当日、配付したアンケートから一ご意見

①大変参考になりました。

三浦先生のお話は良かったと思います。

②シラバス作成演習は作業のためのディスカッションを通して色々な考え方を聞くことができて有意義だった。開講条件の違いがシラバスに反映されるプロセスが興味深く、様々な条件下で学んでも資格としては同一のものが与えられることの現状について考えさせられた。

③現在置かれている状況、内容がどうしても強めに反映してしまうため、各自の間を調査（調整？）するには実際にはもっと時間がかかると思います。ですが大変よい機会を与えていただいたと思います。

④年度始めの研修会は仲々出席しにくい。従来の夏の開講が良かった。（文責 阪田蓉子幹事）

挑戦！ 「図書館概論」 シラバスづくり（前編）

はじめに

研究集会の午後は、「図書館概論」のシラバス（授業計画）作成をテーマに掲げ、講義と演習による参加型のプログラムを実施した。講義は、「『図書館概論』の役割と構成」とするもので、大学における司書養成課程を念頭において、その期待される役割と、開設（開講）形態の違いがもたらす教育面への影響についての理解を深めた。また、既存のテキスト類ならびに諸大学が公開しているシラバスを整理し、そこから「図書館概論」の構成を整理した。一方演習は、参加者を複数のグループに分け、それぞれに一定の開講条件を示し、それに基づく討議を行い、シラバスを作成する取り組みがなされた。また、各グループが作成した結果を資料として配付し、それらを比較検討しながら、各グループで配慮したことがらや発見した問題点などを話し合った。

【講義の概要】

1 「図書館概論」に期待される役割

「図書館概論」には、以下の三つの意義がある。

- (1) 開始科目としての意義
- (2) 基礎科目としての意義
- (3) 総論科目としての意義

(1)は、司書養成課程の諸科目の中で、「図書館概論」は、通常最初に学生が受講すべき科目であることに基づく意義である。したがって、養成課程に対するオリエンテーション的な内容を取り扱う。すなわち、養成課程の諸科目を鳥瞰し、様々な案内を行ったり、学習方法を指導したりする。また、司書養成の学習を継続して行う意思について、学生に判断を促す機会にすることもある。(2)は、諸科目の基礎となる科目であることから、「図書館」に関して知らなくてはならない基本的な知識を伝達し、諸科目で扱う発展的な知識との連関がなされるよう配慮することである。(3)は、「図書館」にかかわる様々な知識を包括的に取り扱うことを意味する。また、学術領域となる「図書館情報学」における位置づけを紹介したり、職業教育としての意識を高めることも考えられる。

小田 光宏（青山学院大学）

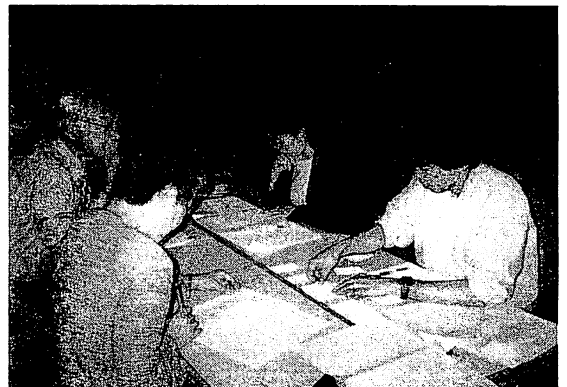
このような意義ふまえて、「図書館概論」のシラバスを作成することになる。

2 開設（開講）形態の違いがもたらす教育面への影響

個別の大学では、「図書館概論」を様々な形態で開設（開講）しており、当然ながら、その形態が教育実践に影響を与えることになる。シラバスを検討する場合にも、抽象的な教育実践の場を想定して議論するのではなく、多様な形態の存在とそれぞれの相違に留意しなければならない。

第一に、科目の形態について着目する必要がある。単位数の相違（2単位もしくは4単位）による内容の取捨選択は当然のことと言えよう。また、「図書館法施行規則」における他科目と組み合わせた「複合科目」（例：「図書館サービス論」と複合して、「図書館学概説」4単位を開設している場合）もあり、そうすると、内容の取捨選択に加えて、組み合わせ方と順序を考慮しなくてはならない。さらに、異なる科目名称（例：「図書館情報学概論」「情報・図書館学概論」など）の持つ効果についても考える興味深い。

第二に、科目の位置づけの違いがある。全国の大学では、司書養成課程以外の科目（例：専門科目、一般教育科目、共通科目、他の資格の選択科目など）としての指定をしている場合もあり、多様な教育的意義の発生と、



グループで演習作業

異質な学習集団への配慮の必要性があろう。また、養成課程以外の科目（諸領域）との内容の調整を行わなくてはならない。

第三に、配当年次指定の相違あるいは有無の問題が考えられる。まず、対象年次の違い（例：1年か3年か）があれば、当然その内容と方法を変えるべきと考えるのが妥当である。また、配当年次の指定により異質な学習集団への対応が、担当教員に求められる。

第四に、履修順序指定の相違あるいは有無を挙げることができ、これは相当に深刻な課題でもある。すなわち、履修順序指定が無ければ、上述した基礎科目としての意義は喪失するわけである。また、他の諸科目と「輻輳履修」の形態となっているわけであるが、そうすると内容の選択と連携が必要になる。さらに、「図書館概論」を諸科目よりも後に履修するという「逆転履修」現象が起こることになり、知識伝達が非効率となる問題に対応しなくてはならない。

第五に、授業の離散と集中について、長所と短所を明確にすることが求められる。大学の場合、一般的には離散（週1回）開講をしているわけであり、連続性を確保することが求められるものの、各回の個別化が容易であることを強調した授業構成を積極的に取り込んでいくとよいと考えられる。一方、集中開講（短期集中授業、多くの司書講習など）においては、担当教員の力量によるところは大きいものの、しくみとしては、内容の理解を深めることが期待できる。

3 「図書館概論」の構成

既存のテキスト類や公開されている大学のシラバスをもとに項目を整理すると、つぎのように、大きく八つに分けることができる。

- α 授業としての進行にかかわる内容（授業一般）
- β 図書館員養成課程（司書課程）の開始科目としての性質に基づく内容
- γ 図書館に対する基礎知識
- δ 「図書館と社会」という視点に基づく内容
- ε 図書館に関係する法的、制度的側面
- ζ 図書館の存立や活動を支える理念や基準
- η 図書館にかかわる全般的な内容
- θ 図書館情報学（図書館研究）に関する知識

また、それぞれを細分すると、表現や表記の違い、概念的なくりによって、様々な項目を列挙することができる。今回は、以下の52項目を掲げ、演習の前提とする。

- 1 イントロダクション（自己紹介、科目概要、授業進行、評価方法）
- 2 学習方法、学習用レファレンスツールの紹介
- 3 参考文献紹介
- 4 養成課程のオリエンテーション（履修順序、資格付与の要件、諸注意）
- 5 諸科目の鳥瞰（諸科目と「図書館概論」との関係）
- 6 進路（就職）の状況
- 7 用語、定義、概念
- 8 図書館の種類
- 9 図書館の業務（活動）
- 10 図書館資料（図書館メディア）
- 11 公共図書館の機能
- 12 学校図書館の機能
- 13 大学図書館の機能
- 14 専門図書館の機能
- 15 国立図書館の機能
- 16 生涯学習社会と図書館
- 17 情報社会と図書館
- 18 出版文化（メディア製作）と図書館
- 19 図書館とまちづくり
- 20 住民運動と図書館
- 21 文庫活動と図書館
- 22 ボランティア活動と図書館
- 23 NPOと図書館
- 24 図書館関係の法制度（法体系）
- 25 図書館法
- 26 学校図書館法
- 27 国立国会図書館法
- 28 社会教育法、教育基本法
- 29 地方自治法
- 30 著作権法
- 31 国の図書館政策（図書館行政）
- 32 地方自治体の図書館政策（図書館行政）
- 33 「図書館の自由に関する宣言」
- 34 「図書館員の倫理綱領」
- 35 「公立図書館の任務と目標」
- 36 「図書館の望ましい基準」

- 37 「図書館の権利宣言」
- 38 「ユネスコ公共図書館宣言」
- 39 「IFLA公共図書館ガイドライン」
- 40 「図書館学の五法則」
- 41 図書館員の役割、能力、資質
- 42 図書館員（司書）の職業制度
- 43 図書館の類縁機関
- 44 図書館ネットワーク（協力と連携）
- 45 図書館関係団体
- 46 日本の図書館（事例紹介）
- 47 外国の図書館（事例紹介）
- 48 日本の図書館の歴史
- 49 外国の図書館の歴史
- 50 図書館情報学の定義
- 51 図書館情報学の諸領域
- 52 図書館情報学の社会的意義

【演習の概要】

4 演習作業の前提

演習作業では、「図書館概論」のシラバスを作成するわけであるが、ここでは、授業の各コマ（回）ごとの授業内容を決定することを試みる。その際、授業内容としては、上記52項目の中から取捨選択することを原則とし、必要に応じて、これらの項目の中にあるものを追記することを求めた。また、開講条件として、いくつかの大学をモデルにし、以下のような6グループを設定した。

I 司書講習開催大学

開 講：約150名の受講生。

時 数：2単位（1コマ90分で、15コマ分を4日間連続で開講。試験実施時間を含む）

配 当：「開講式」に続いて授業開始。直後の後続科目は、「生涯学習概論」と「図書館サービス論」。

その他：資格の付与にかかわるオリエンテーションに相当するものは無し。

II 4年制大学の図書館員養成課程

開 講：文科系3学部の大学。全学部に開放。約60名の受講生。

時 数：2単位（1コマ90分で13週分開講。試験

実施時間は別に有り）

配 当：科目別の配当年次指定が比較的厳格。すなわち、「図書館概論」は、2年前期で履修することが原則。その他の科目は、2年後期以降に配当。

その他：養成課程そのもののオリエンテーションは、2年進級時に別途実施済。

III 4年制大学の図書館員養成課程

開 講：6学部の総合大学。全学部に開放。約80名の受講生。

時 数：2単位（1コマ90分で12週分開講。試験実施時間は別に有り）

配 当：科目別の配当年次指定無し。2年次から履修可。

その他：養成課程そのもののオリエンテーションは、2年進級時に別途実施済。

IV 短期大学の図書館員養成課程

開 講：女子短期大学。課程は、教養学科に所属。約100名の受講生。

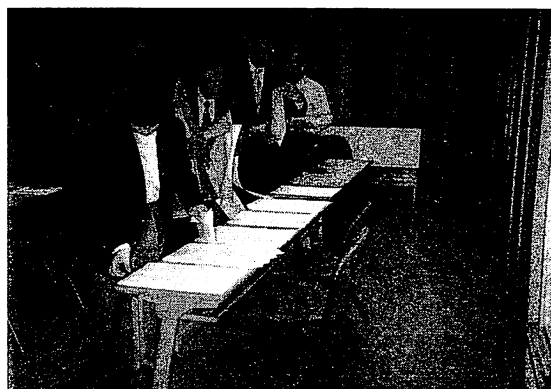
時 数：2単位（1コマ90分で13週分開講。試験実施時間は別に有り）

配 当：科目別の配当年次指定無し。

その他：養成課程そのもののオリエンテーションは、1年入学時に別途実施済。

V 4年制大学の文学部教育学科

開 講：6学部の総合大学。文学部教育学科の開設科目（卒業要件科目に算定可、すなわち、資格取得を目的としない受講生を含



演習用教材を受けとる

む)。ただし、資格科目としては全学部
に開放。約120名の受講生。

時 数：2単位（1週コマ分で11週分開講。試験
実施時間は別に有り）

配 当：科目別の配当年次指定無し。2年次から
履修可。

その他：養成課程そのもののオリエンテーショ
ンは、2年進級時に別途実施済。

VI 4年制大学の「図書館情報学」専攻コース

開 講：専攻コースの卒業要件（必修）科目で、
「図書館情報学概論」の名称で開設。専
攻生以外履修不可。約40名の受講生。

時 数：2単位（1コマ100分で15週分開講。試
験実施時間を含む）

配 当：科目別配当年次指定が厳格。すなわち、
「図書館情報学概論」は、2年前期に履
修することが原則。その他の科目は、2
年後期以降に配当。

その他：資格の付与を含む履修オリエンテーショ
ンは、2年進級時に別途実施済。

5 演習実施

演習にあたっては、参加者を上記「開講条件」別のグ
ループにランダムに分け、討議の上、シラバスを作成す
ることを課題とした。勤務する大学と大きく異なる条件
になった場合は、当該条件を持つ大学から「兼任（非常
勤）講師」を依頼されたと仮定して、取り組むよう促し
た。また、上述の52項目をカードに印刷し、各グループ
に1セット配布して、作業の便宜を図った。また、同じ
項目をタックシールに印刷し、これを表に貼り付けられ
ばすむようにした。貼り付けて項目を一覧できるようにし
たものが、「シラバス表」である。もちろん、追記用の
白紙のカードやタックシールも用意した。なお、時間は
40分とし、約30分を討議に当て、残り10分で「シラバス
表」を完成するようにした。

以上が、講義と演習の概要である。作成された「シラ
バス表」については、部会報次号において掲載する。ご
期待願いたい。

平成13年度（第87回）全国図書館大会 第12分科会へのお誘い 10月25日第12分科会（図書館員養成） テーマ 「高度な専門性を目指す図書館情報学校教育」

【プログラム】 9：00－ 受け付け

9：30－ 開会の挨拶 高山正也部会長（慶應義塾大学）

9：40－ 基調講演 葉袋秀樹氏（図書館情報大学）

現職の経験を持ち、現在は日本図書館情報学会誌編集長でもあり、今春には「図書館運動は何を残したか？」を上梓された図書館情報大学教授葉袋秀樹氏に日本の図書館界における専門職の現状と問題点を論じていただきます。

11：10－ 質疑応答

11：30－ 昼食

12：30－ 講演 1 江口昇勇氏（愛知淑徳大学大学院コミュニケーション学研究科教授）

近年、注目を集めている専門職である臨床心理士についてその資格付与、職域における既存の専門職との関係、資格取得者や社会の新しい資格に対する心構え、イメージなどを講じていただきます。

13：30－ 講演 2 田中敦司氏（名古屋市西図書館奉仕係長）

早くから司書職制度を整えてきた愛知県名古屋市の公共図書館から専門職の教育と養成について、また継続的な研修とその評価方法そして現状の問題点について述べていただきます。

14：30－ 講演 3 玉井英司氏（文部科学省社会教育課）

文部科学省という行政の立場から情報専門職の問題についてお話を伺います。

15：30－ 問題点の整理・質疑応答 高山正也部会長（慶應義塾大学）

16：00 終了

【会場】会場はJR東海道本線岐阜駅徒歩2分、名鉄線新岐阜駅より徒歩3分のホテルグランパレです。JR岐阜駅中央北口目の前の交差点の角に位置し、屋上にある大きなネオン看板が目印です。URLは<http://www.grandpalais.co.jp/>です。皆様のご参集をお待ちしております。

図書館学教育部会2001年度第1回研究集会に参加して

阿部 悦子（四国大学文学部）

司書養成科目・司書教諭養成科目の改訂以後、研究集会では新科目やコンピュータに関連した科目をメインテーマとして取り上げてきたが、今回は、比較的オーソドックスな科目と言える「図書館（学）概論」が中心であった。大学等では、この科目は比較的人生経験の豊富な教員が担当しているのが現状ではないだろうか。そしてこの状況は今回の参加者数にもあらわれていたように思われる。私は今回の研究集会の案内を受け取った時、参加を戸惑ったが、実際に参加して多くの収穫を得ることが出来た。

三浦氏は、「図書館学教育と図書館概論」と題した基調講演で、図書館学教育について日本とアメリカの場合を比較しながら、日本の図書館学教育の現状やその問題点等について話された。図書館学に関する講演や研究会等のほとんどが東京で開催されるので、学術的な講演を聴く機会が余りない筆者にとって、色々と勉強させていただいた。

二村氏は、「図書館概論」について、日頃の授業内容を詳細に話された。今後「図書館（学）概論」を担当する際に、参考にさせていただきたいと思っている。また、インターネットを利用した遠隔学習システムの構築についても興味深く聞かせていただいた。

小田氏による講演と演習では、講演に引き続いてシラバス作成の演習が行われた。研究集会で演習形式を取り入れたのは、今回が初めてであり、今後シラバスを作成する時に、この方法を参考にしたいと考えている。また、グループ形式による演習は、日頃あまりお会いできない先生方とのコミュニケーションの機会ともなり、大変良かったと思っている。

今後、研究集会では、全体会議（討議）だけでなく、今回のようなグループ別演習やグループ別討議のような方法も取り入れられては如何でしょうか。

小黒 浩司（作新学院大学女子短期大学部）

1991年の大学審議会答申以来、授業の充実であるとか、あるいはファカルティ・ディベロップメント（FD）の実施といったことが、大学関係者の間でさかんに取り沙汰されるようになった。こうしたいわゆる「大学改革」の流れは、1998年の同審議会の答申を経て、一層強まったようだ。

今回の研究集会のテーマ「21世紀図書館学の確立と発展—「図書館（学）概論」を中心に—」は、上記のような全体状況をふまえて設定されたものであろう。とくに副題が示すように、司書養成課程のなかで最も基礎的・根幹的な科目といえる「図書館概論」の授業のあり方を再検討する内容であったことは、これからの図書館学教育の進むべき方向を考える上で、実に意義深いものであったと思われる。この間の準備等にあたられた部会幹事諸氏のご努力に敬意を表する次第である。

しかしながら、研究集会の掉尾を飾った、参加者をグループ分けして行なわれた「図書館概論」のシラバス作成演習からは、期待したような結果は得られなかったように、個人的には思われた。検討のための時間不足もあるが、各所属機関の諸々の「特殊事情」や、参加者の教育観などが入り混じり、誰もが納得できるようなシラバスは出来上がらなかったのではなかろうか。

それはしかし、今回のシラバス作成演習の試みそのものを否定することではない。むしろ「図書館概論」以外の諸科目にも、同様の取り組みを広げなければならないと考えるのである。そのためには何より、すぐれた実践例を数多く集め、それらを各科目の領域と相互に関連付けながら、十二分に吟味することが必要であろう。そしてその積み重ねのなかから、ある程度の一致点が見出せると思われる。

それぞれの養成課程等の個性化と、図書館学教育の標準化の追求という、相反するともいえる課題に、いま直面していることを改めて確認させられた、今回の研究集会であった。

川原 亜希世（近畿大学短期大学部）

大学の教員は教えるための技術を学んでいない。私自身、授業のたびに学生の反応に一喜一憂しながら、分かりやすい授業のあり方を模索している。私にとって図書館学教育部会の研究集会は、日頃感じている疑問点を整理してくれるありがたい機会になっている。

今回の研究集会では、「図書館概論」のシラバス作成の演習があり、グループごとに異なる開講条件でシラバスを作成した。司書講習、四年制大学、短期大学、四年制大学の「図書館情報学」専攻コースなど、6つの条件で作られたシラバスには、それぞれの事情が表れており興味深かった。様々な条件の下で学生達は少しずつ異なる教育を受けているということが、実感できた。作成の

ためのディスカッションを通じて、他の先生方の授業のノウハウをお聞きできたのも楽しかった。その点では、二村先生の授業のプリントを資料とした実践報告も大変参考になった。私にとって大変有意義な研究集会だった。

五十嵐 一郎（京都橘女子大学）

最初からの参加をと前日に八重洲口近くのホテルに泊まり、十分な時間を残して出向いた筈ですが、茅場町駅を出てから会場に着くまでに手間取り、何のことはない遅刻してしまいました。

会長挨拶は勿論、基調講演も始まっており、席につい

ても汗となんとということだとの思いで心が落ち着かず、講演に集中出来ませんでした。二村氏の事例報告からは集中でき、私自身の担当している『概論』の教え方との違いに、とても興味が持てました。

午後の総会後の講演と実習も新米の私には示唆深いものでしたが、特に演習（シラバス作成）はS先生と同じ班で、先生の造形の深さに教えられるところが多くありました。ただ、グループの人数が少なかった事と時間が短かった事が残念です。

最後に有意義な会なのに、全体としての参加が少ないのは何故なのでしょう。私のステップアップに大変役立ちました。有り難うございました。

新（指 名）幹 事 自 己 紹 介

大谷 康晴（青山学院女子短期大学）

このたび幹事をやらせていただくことになりました大谷康晴と申します。今年から青山学院女子短期大学の専任講師として司書課程を担当しています。専門的な意味での関心は図書館経営・図書館政策ですが、現在の個人的な関心としては、東京の地名と中古CD屋巡りに向けられています。なお私は、姓名が将棋の名人であった故・大山康晴氏と一字違いになっています。名前については何度か両親に尋ねたのですが、将棋を教えたにも関わらず父は未だに憶えていて教えてくれません。一時はプロのもとで指導を受けていた時期もありましたが、人生他にも楽しいことがあると知って挫折をして、今では新聞の将棋欄でウンウンうなっている程度です。どうも古臭い話ばかりになってしまいましたが、自分としては若手（市民の図書館以降）代表としてお手伝いできたら、と思っています。どうかよろしくお願いいたします。

岡田 靖（鶴見大学）

1944東京に生まれる。2年も浪人してやっと大学へ。浪人の間に憶えた悪いことの数々が後の人生に大いに役立つ。就職もままならないのでとりあえず大学院でも行くかと。修士だけなのに4年在籍。在籍中に某大学図書館に就職。そこも2年しかもたずに、大学院時代の恩師に泣き付いて外務省外郭団体の某図書館に再就職。1年半でまたもや転職。図書館短期大学（現在の図書館情報大学の前身）助手となる。図書館情報大学助手時代も含めて計7年助手生活を送る。このへんは割と暢気。というより研究

業績をあげないので当然といえば当然。やっとなと鶴見大学の専任となる。ここでも12年間助教生活の後やっとなと教授に。現在に至る。趣味は食べる事と飲む事。幹事としては2回目のお勤めだが、前回もあまり役に立ったという記憶はない。他の幹事の皆様の邪魔をしないように何とか2年間無事に過ごせたらと思っています。

田中 岳文（東海大学）

最初の勤務先は九州のとある田園地帯にある短期大学でした。裏を流れる小川には翡翠が、最寄駅には狸が出没しました。春には近所に広がる二毛作の田が麦で緑の絨毯と化し、その中を突っ切って通勤していました。つぎは信州の小都市郊外にある短大で、研究室から窓の外をみればそこは広葉樹の森。ときおり、木を連打する啄木鳥の軽快な音を耳にしながら仕事していました。今年から働く職場は東京の都心から南西に60kmあまり、北に丹沢山系を望む広いキャンパスには雉が棲んでいるとか。

ただ、生活環境の良さと、職能上の環境のそれは、残念ながらからならずしも一致しません。イベントや同業者と直接接する機会の少なさからくる“生きた情報”への飢餓感は、大都市を活動拠点とする方々にはなかなか実感を持ってもらえないことかもしれません。部会運営をお手伝いさせていただくなかにあって、そうした視点を持っていられたなら、それも片道2時間かけて部会幹事会に出向くことの意味のひとつと考えております。よろしくお願いいたします。

編集後記

新たな世紀、新たな部会の歩みを前に、部会報の装いも、太い幹に芽をだした若葉を想定し、淡い緑を選んだのですが、いつの間にか猛暑の季節に…という訳で浅黄色に変えました。

部会報に対する読者のみなさまのご意見、ご希望等をぜひお寄せください。

（Y S）